

ワンディバ教授と
ナイロビ大学アフリカ研究所

太田 至

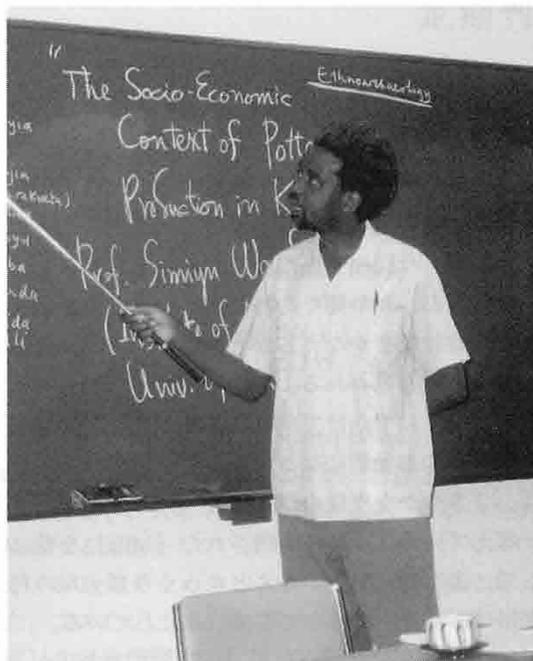
ナイロビ大学アフリカ研究所の所長であるシミユ・ワンディバさんは、1994年5月11日から6月8日までの約1カ月間、来日された。私たちは1993年度から弘前大学の北村光二さんを研究代表者として、文部省の科学研究費補助金（国際学術研究）をうけて「北ケニア牧畜民の『近代化』にともなう社会変容の人類学的研究」という研究課題にとりくんでおり、ケニアでの現地調査はナイロビ大学アフリカ研究所の研究協力者という資格でおこなっている。今回のワンディバさんの来日は、日本でのアフリカ研究や「伝統と近代」にかかわる人類学的研究の現状を理解してもらうとともに、今後の学術協力体制を確立しようという目的で、日本学術振興会の招聘によって実現した。

ワンディバさんは1945年の西部ケニア生まれ。専門は考古学である。ナイロビ大学で修士課程をおさめた後、イギリスのサザンプトン大学に留学し、大学院で博士課程を終えて学位を取得している。その時代をふりかえってワンディバさんは、「あのころは、いまから思いかえしても本当によく勉強した」と述懐していた。1980年には留学生活からケニアにもどり、国立博物館の考古学部門で主任研究員の職についている。ケニアの国立博物館といえば、かのL.S.B.リーキーがオルドヴァイなどで人類最古の石器文化の担い手を求めて活躍していたときの拠点であり、その後も人類進化の謎をさぐる先史人類学、考古学の分野では世界的な研究基地のひとつである。そこで9年間の研究生生活をおくったワンディバさんは、とくに8-9000

年前に始まるケニアの土器文化についての権威となり、多数の論文と『ケニアの土器と土器制作者たち』『西ケニアにおける歴史と文化』などの編著書を出版している。

私たちの人類学・民族学的な研究との接点もある。ワンディバさんは従来の考古学的な手法にはあきतरらず、発掘された「モノ」について解釈をくだす際には社会的・文化的、あるいは経済的な背景についての考察が不可欠だという立場から民族考古学（エスノアーケオロジー）の分野に研究を発展させ、実際に土器製作を中心的なテーマにした民族学的な調査をケニアの各地で実施している。今回の来日の際には、5月24日に京都大学アフリカ地域研究センターの公開セミナーで話題を提供していただいたが、そのときの演題も「ケニアにおける土器製作の社会・文化的、および経済的なコンテクスト」というものだった。

その一端を紹介しよう。ケニアの多くの民族において土器製作は、ほかの文化的な要素と緊密に結合している。たとえばブクス人のあいだでは、土器の原料となる土をとる場所は儀礼的なだけなわけをもちこんではならない神聖な場であり、初潮をむかえた以降の女性は立ち入りを禁止されているし、月経中の女性や前日に性行為をもった人びとは土器製作に従事してはならないとされている。また、儀礼にもちいる醸造酒をつくるための大きな土器は男性が製作し、水がめや料理用の土器は女性が製作するというように、土器製作はジェンダーの役割を定義する装置として機能している。



京都大学アフリカ地域研究センターで講演する
ワンディバ教授

あるいはギクユ人社会では、結婚式のときにつくられる伝統的な料理は、かならず土器で調理されねばならない。すなわち土器は、人間の人生の節目となる通過儀礼においても重要な役割をはたしている。また、現代のケニア社会では農村部でも貨幣経済が急速に浸透しているのだが、とくに女性たちにとって土器製作は、現金を得るための重要な手段のひとつとなっている。土器製作には大きな資本は不要であり、厳密なタイムテーブルにもとづいて作業を進める必要もない。そのため、さまざまな家事労働をこなさねばならない女性たちでも、土器製作に従事することができる。そして、土器製作にかかわる女性たちが一種の協同組合を組織し、おたがいに資金を提供しあって経済的な相互扶助をおこなっている社会もある。ある意味で土器製作は、社会的な結集力を媒介するものとなっているのである。

このようにワンディバさんの学問的な興味は、たんなる「モノ」をあつかう考古学の枠をおおきく越境している。彼が京都に滞在していた期間には、私たちは学生をまじえて夕食のときから一緒にビールのグラスを傾け、しばしば深夜におよぶまで議論に花を咲かせていたのだが、いつも話題はつきることがなかった。ワンディバさんは大のビール党で「日本のビールはヤワすぎる」とぼやいていたのだが、私たちは夕食のレストランを出たあと「帰るにはちょっと早すぎるかな」「あんたがそう言いだすのは、とっくにわかっていたさ」などという会話をかわしながら、夜の街を歩きまわったものである。ワンディバさんは、普段はどちらかと言えば物静かな人なのだが、ビールがまわってくるとウィットとシニシズムのまじりあった弁舌がさえわたるエンターテイナーでもあった。1992年の12月に最初の複数政党制による総選挙をおこなったケニアでは、いま、民族意識と国家意識がぶつかりあうなかで政界の再編が進行中だが、それについて彼が裏話を披露しながら分析するのを聞くことも、私たちの大きな楽しみのひとつだった。

ところで、ワンディバさんが所属するナイロビ大学アフリカ研究所は、歴史家のB.A. Ogotを初代の所長として1970年に設立され、文化人類学や考古学、口頭伝承、物質文化、そしてアフリカ諸言語などに関する研究を推進してきた。そして研究所の活動は機関誌『Mila』（スワヒリ語で「文化」を意味する）をとおして、私たちがもとにとどけられていた。この雑誌の初期のころの寄稿者には、所長だったOgotをはじめとして、昨年から国立民族学博物館に滞在していたジュバ大学教授のTaban lo Liyongや、E.S. Atieno Odhiambo、Okot p'Bitekなどのそうそうたるアフリカ人研究者がならんでおり、この研究所の発展にかけようとする当時の人

びとの意気込みがずっしりと伝わってくる。

しかしながら、この雑誌は7巻14号まで発行されたのち、資金難のために現在は休刊を余儀なくされている。今回の来日に際して、ワンディバさんが日本までかかえてきた課題のひとつは、この雑誌を再刊するための援助が得られないだろうかというものだった。出版の費用は1年に15万ケニアシリング（約25万円）ほどである。私たちはその後、ワンディバさんもふくめて何人かの人びとと話した結果、以下のような方針で『Mila』の再刊を支援することにした。

第一に、この援助は3年間をめどにする。第二に、再刊された雑誌には「日本のアフリカニストの個人的な支援によって刊行されている」ことを明記する。第三には、この期間に立派な雑誌をつくってもらい、それをいわば「元手」にして個人

的な支援への依存から脱却し、何らかのかたちで独立採算を実現させるといった道を模索する。つまり、もう一度『Mila』が離陸するためのお手伝いをし、その後の飛行は自助努力にまかせようというのが、今回の支援の基本的な考え方である。

もちろん、3年間で約75万円という資金を個人からの寄付でまかなえるかどうかについて、樂觀はできないと思われる。しかし、私たちが日本からアフリカにでかけてゆき、さまざまな形で現地の人びとのお世話になっていることを思いかえせば、ささやかな支援の試みにも十分に意義があると考えている。そして再刊された『Mila』を前にして、またワンディバさんとゆっくりビールの杯を傾ける日を、私はとても楽しみにしている。

（おた いたる 京都大学アフリカ
地域研究センター）

MILA再刊支援のお願い

以上のような事情により、ナイロビ大学アフリカ研究所の機関誌MILAの再刊支援を、関係の皆様をお願いしています。

送金方法は以下のとおりです。よろしく願いいたします。

金額：一口1,000円で何口でも結構です。

送金先：郵便振替「ミラ再刊支援の会」口座番号/01050-4-83133

銀行振込「ミラ再刊支援の会」第一勧業銀行百万遍支店 普通口座/1871140

連絡先：〒606-01 京都市左京区吉田下阿達町46

京都大学アフリカ地域研究センター

太田 至

Tel : 075-753-7802 Fax : 075-753-7820